

長崎県美術館2023

先生のための

鑑賞教育×平和教育プラットフォーム

PEACE

Peace Education through
Art Content Explorer

ガイドブック



ごあいさつ

本冊子は、長崎県美術館を中核館とする「学校とミュージアムの共創—平和教育と鑑賞プログラムの開発・活用」プロジェクトで開発した鑑賞ツールのプラットフォーム「PEACE (Peace Education through Art Content Explorer)」のガイドブックです。本プロジェクトは「令和5年度文化庁Innovate MUSEUM事業」の採択を受けて実施したものであり、当館の所蔵作品をもとに、鑑賞を通して平和について思考を巡らせる、「美術で学ぶ平和教育プログラム」を学校と共創して構築することを目的としています。

美術館にとって学校との連携は教育普及活動の中核事業のひとつであり、学校現場においても新学習指導要領で博物館などの社会教育施設との連携や美術館・博物館等の積極的活用が、配慮すべき事項として挙げられています。当館では2005年の開館以来、スクールプログラム等を通して学校との連携を進めており、2021年度は所蔵作品を活用した平和教育の出張授業、2022年度は学校現場の先生方との授業案づくりと、それに関連した鑑賞ツール・遠隔教育プログラムなどの開発を行いました。

プロジェクト3年目となる今年度は授業案や鑑賞ツールの普及活動をはじめ、鑑賞ツールの加増、鑑賞ツールのプラットフォーム化に取り組みました。「PEACE」を通じて、校種や地域を問わず様々な形で美術館活用の幅が広がることを期待しています。

末筆となりましたが、本プロジェクトの意図に賛同し、実行委員会に参画いただいた長崎県、長崎県教育委員会、長崎市教育委員会の関係各位、授業案の実践や鑑賞ツール開発に多大なるご協力をいただきました学校の先生方に心より御礼申し上げます。

長崎県美術館 教育普及・生涯学習

目次

ごあいさつ	p.01
プロジェクト概要	p.02
・平和教育に資する鑑賞教育	
・プロジェクトのあゆみ	
先生のための鑑賞教育×平和教育プラットフォーム「PEACE」できました!	p.06
・「PEACE」コンテンツ紹介	
・授業案と鑑賞ツール、使ってみました!	
「PEACE」のあれこれ—「PEACE」開発者と鑑賞ツール利用者による座談会	p.12
・「座談会を終えて」山岸利次(長崎大学人文社会科学域教育学系 准教授)	
編集後記	p.17

プロジェクト概要

長崎県は被爆県として第三期長崎県教育振興基本計画の主要施策のひとつに平和教育の推進を挙げており、子どもたちの恒久の平和を希求する態度を育む必要があるとしています*。そのため、県内の小・中・高等学校において発達段階に即した系統的な平和学習が毎年行われています。

当館では開館当初より対話を伴う鑑賞活動に取り組んでおり、自分の考えを整理して伝え合う鑑賞は自他理解へとつながり平和教育と結びつくのではないかと考え、2021年度より平和教育に寄与する鑑賞教育プログラムの考案・実施をスタートさせました。所蔵作品の画像をじっくり鑑賞する出張授業に始まり、小・中学校の先生方と協働した鑑賞授業づくりや鑑賞ツールの開発・公開、美術館活用の幅を広げるべくロボットを取り入れたプログラムやシンポジウムの実施など、様々な角度から本プロジェクトを発展させてきました。

今年度は、取り上げる所蔵作家を合計5組に増やしてバリエーションに富んだ授業案と鑑賞ツールを考案し、インターネット上で利用できるようプラットフォーム「PEACE」の開発に取り組みました。また、授業案や鑑賞ツールを広く普及させるため、あらゆる校種の先生を対象とした説明&体験会「ティーチャーズデイ」も複数回実施しました。これにより鑑賞ツール・授業案および活用事例の件数・校種・教科の拡充と、保育園から大学まで、多くの先生方との協働によって本プロジェクトをさらに発展させることができました。

*出典:長崎県『第三期長崎県教育振興基本計画 2019-2023年度～長崎の明日を拓く人・学校・地域づくり～』2019年、p.42

長崎県美術館 鑑賞教育の拠点

- 実施者** エducーター、学芸員
- 強み・特徴**
- ・所蔵作品の活用
 - ・作品に関する情報・知識の提供
 - ・鑑賞教育コンテンツ・ツールの開発

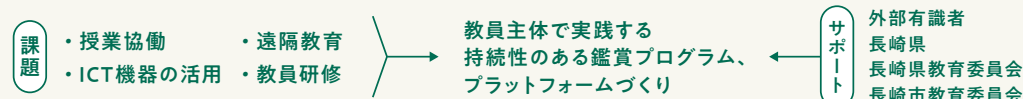


学校教育現場 平和学習の拠点

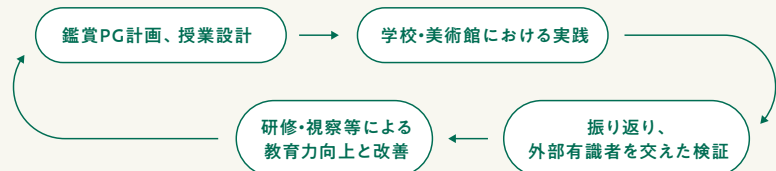
- 実施者** 教員、学習者(園児～大学生)
- 強み・特徴**
- ・授業づくりのノウハウ
 - ・日頃接する学習者の傾向や個性に対応した実践



共創 美術館を活用した平和教育プログラム



事業プロセス



平和教育に資する鑑賞教育

戦後の日本における平和教育は、戦争の歴史や被害の実相を学ぶことで平和や反戦について考える学習が主流でしたが、戦争の悲惨さや非人間性を知った学習者が人間の無力さを感じ、平和への思考停止を引き起こすことが危惧されるようになりました(*1)。1970年代になると、平和教育において戦争に関する問題を学習する「直接的平和教育」と並行して、人権意識や仲間意識を醸成する「間接的平和教育」の必要性が叫ばれるようになります。間接的平和教育とは、「文学や歴史の学習」「音楽や絵画制作」「スポーツや集団活動」「仲間づくり」などを通して行われるものであり、平和を希求する主体を育成するための学習です。

さらに1980～90年代には、平和の概念を「暴力の不在」とする理論がヨハン・ガルトゥングによって展開されました。この暴力とは、戦争や物理的な暴力など行為の主体が明確な「直接的暴力」と、貧困・差別・搾取など、行為の主体が不在の「構造的暴力」、そして直接的暴力・構造的暴力を正当化する「文化的暴力」の3種類に分類されます。この理論の台頭により、戦争という国家規模のマクロな暴力だけでなく、いじめや自殺の問題など、学習者自身が生きるミクロなコミュニティのなかで発生する暴力にも平和教育は向き合うことになりました。こうした戦争・環境・人権などの問題を広く内包する「包括的平和教育」は欧米をはじめ、2000年代から日本でも取り入れられています。

鑑賞とは個人の美的感覚を刺激し、その刺激を意味づける想像力や知性を必要とする行為であり、その経験は自身の趣味嗜好やあらゆる価値判断などの基準を構築し、人間形成にも影響を及ぼします。このような観点から、鑑賞は学校教育でも重視されるようになり、現在の小・中・高等学校の学習指導要領では「A表現」「B鑑賞」と二本の柱を形成しています。

本プロジェクトは、平和教育に資する鑑賞教育として、教育現場で使える授業案や鑑賞ツールを開発し普及することを目的としており、鑑賞の手法として「対話」を重視しています。対話を伴う鑑賞については、1991年にニューヨーク近代美術館で開発された、複数人で美術作品について対話することを通して観察力や傾聴力、言語能力など複合的な能力を培う鑑賞教育プログラムVTS (Visual Thinking Strategies)を参考にしています(*2)。

作品と向き合い、根拠を示しながら感じたことを言葉にして伝え合い、もう一度作品をみて考え、また話す、というサイクルを繰り返すことで、学習者は自分の感性や考え方に気づき、他者との相違点を知ることができます。そうした経験は、自己・他者に対する想像力や思考力、コミュニケーション能力の向上につながり、これは平和教育が求める「仲間意識」や「人権意識」の醸成へ直接的に作用するものと考えられます。よって、本プロジェクトが開発する鑑賞プログラムや授業案は、対話を伴う鑑賞活動を中心に据えて展開してきました。

しかしながら、学習者が対話する相手はクラスメイトだけではありません。本プロジェクトが取り上げた作品や作家たちは、原爆やホロコースト、キリシタン弾圧、スペイン内戦、亡命と、それぞれ国や時代、政治、思想など多様な背景をもっています。学習者が作品と向き合い、作者や作品世界を含めた「他者」への想像力を高め、自分が身を置いている環境などについて視点や思考を行き来させることで、過去につくられた作品と現在を生きる自分とのミクロとマクロな視点を交差させる鑑賞への発展を本プロジェクトは期待します。

これまで開発してきた5組の作家の授業案や鑑賞ツールは、プラットフォーム「PEACE」にすべてのデータを収め、2024年4月頃から公開・運用を開始する予定です。多くの学びの場で平和教育や鑑賞教育としてはもちろん、より幅広い目的で「PEACE」を活用いただけるよう今後もさらに進展させていきたいと考えています。

*1: 平和教育の歴史的な展開については以下参照:竹内久顕著『平和教育を問い直す一次世代への批判的継承—』法律文化社、2011年。ヨハン・ガルトゥング著、高柳先男・塩屋保・酒井由美子翻訳『構造的暴力と平和』中央大学出版部、1991年。ミクロ・マクロな暴力に向き合う未来志向の平和教育の在り方については以下に詳しい:山岸利次著「応答する平和教育のために—事実の継承から現在・未来への応答へ」山口百合子・堀越蒔子編『長崎県美術館2022 学校とミュージアムの共創—平和教育と鑑賞プログラム開発』学校と共創する美術で学ぶ平和教育実行委員会、2022年、pp.4-6。

*2: VTSでは鑑賞者の自由な想像を尊重するため作品情報を提示しないが、本プロジェクトでは作品の背景にも目を向けた鑑賞を促すため、学習者の反応や年齢に合わせて作品情報を提示することとしている。VTSの内容や手法については以下参照:フィリップ・ヤノウィッチ著、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター翻訳『どこからそう思う? 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー』淡文社、2015年。

プロジェクトのあゆみ

2020

プロジェクト発足

ピックアップ作品:

丸木位里・俊《母子像 長崎の図》1985年

長崎県内の小・中学校が平和学習に取り組み夏に、戦争や原爆を主題とした丸木位里・俊の《母子像 長崎の図》を鑑賞するプログラムを当館の展示室にて実施した。児童生徒は、作家の制作現場やインタビューなどの映像資料を視聴した後、実作品を前に、作品から受ける印象や作品のなかの世界について話し合った。多くの学校の参加を受け、平和教育につながる鑑賞プログラムの需要や可能性を見出したことで、本プロジェクトの構想が生まれた。



2021

ICT機器を活用した鑑賞授業の実施

ピックアップ作品:

池野清《鳩笛たち》1959年、他4点

原爆症と闘いながら生涯制作し続けた長崎市出身の作家、池野清の油彩画作品5点を取り上げた。静謐でやや抽象的な表現を得意とした池野の作品から受けた印象や自分の気持ちに向き合う鑑賞プログラムを小・中学校向けに考案した。さらに、GIGAスクール構想や多くの離島を抱える長崎県の地理的特性を踏まえて、ICT機器を活用した、エドゥケーターによる出張授業の形式で実践した。

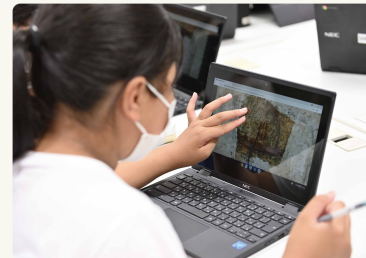
油彩画サンプル製作

油彩画になじみのない児童生徒が作品をイメージしやすいよう、油彩画のサンプルを製作し、手にとって画面の油絵具を触ってみたり、においを嗅いだりしてから、作品画像の鑑賞に臨んだ。



ICT機器の活用・動画製作

児童生徒のChromebookに作品画像を取り込み、各自自由に拡大縮小しながら観察した。また、池野清とその作品をより深く知ることができるよう、学芸員が作家や作品を解説する動画を製作し、出張授業などで視聴した。



研修・視察・普及活動

- ・教員向けオンライン講演会・研修会
- ・エドゥケーター向け研修会
- ・遠隔授業、適応指導教室を対象としたオンライン授業
- ・広島視察

成果と課題

- ・動画やChromebookなどを活用したことで、様々な角度から作品へアプローチでき児童生徒がより多くの気づきを得られ、活発な意見交換につながった。
- ・鑑賞をサポートするツールとして、油彩画サンプルは非常に有効であったが、より利便性を高める目的で、デジタルで使用できるツールも開発したい。
- ・プログラムの形式について、エドゥケーターの出張授業では普及率が低く、より学校現場で先生が使いやすい鑑賞プログラムの考案が求められる。

2022

授業案・デジタル鑑賞ツールの開発と公開

ピックアップ作品:

エドゥアルド・アロージョ

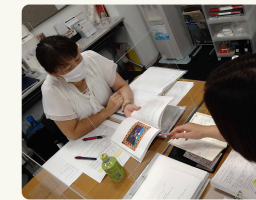
《ハエの案図、あるいは

ヴァルター・ベンヤミンのポル・ボウでの最期》1999年

来館やエドゥケーターの派遣を前提としない、学校の先生主導で実施可能な授業案を現場の先生方と協働してつくり上げた。同時に、作品の立体部分を3D画像化したデジタル鑑賞ツールの開発にも取り組み、授業案とともにインターネット上に公開した(限定公開)。

授業案づくり

長崎市立大浦小学校教諭の松浦憲子先生、長崎市立淵中学校教諭(当時)の森法子先生にご協力いただき、約半年かけて検討会と実践を踏まえた授業案を小学校・中学校向けにそれぞれ考案・実践した。



デジタル鑑賞ツールの開発

長崎大学情報データ科学部と連携し、画面上での作品鑑賞をサポートするデジタルツールを開発した。さらに、南島原市のこども園にご協力いただき、デジタルツールの試験運用を兼ねてオンライン鑑賞会を実施した。



研修・視察・普及活動

- ・教員向けオンライン研修会／シンポジウム
- ・遠隔操作ロボットを活用した美術館・博物館の遠隔交流プログラム
- ・沖縄視察

成果と課題

- ・小中学校、大学の先生方とそれぞれの専門性を活かした協働を実現し、幅広い校種や地域の学校現場で鑑賞授業やプログラムを行う環境を整えることができた。今後は周知と普及活動を行い、プログラムをブラッシュアップする必要がある。
- ・取り上げる作品を限定せず、バリエーションを増やす。

2023

授業案の拡充とプラットフォーム化

ピックアップ作品:

・東松照明《「山口仙二さん」長崎市平野町

原爆資料館》1998年、他14点

・舟越保武《原の城》1971年

これまで実施した鑑賞プログラムを授業案の形につくり直し、写真、彫刻の作品の授業案を新しく考案・実践した。さらに、授業案と作品の高精細画像や動画、関連資料などをまとめた教員向けプラットフォーム「PEACE」を開発した。

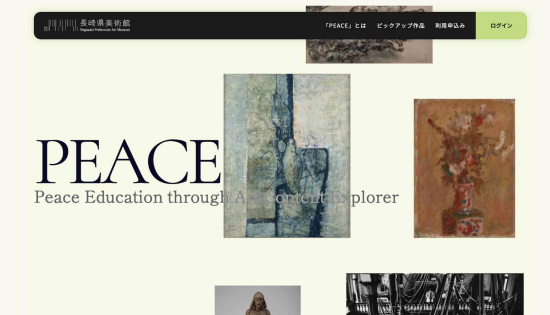
授業案の拡充

日本画、油彩画に加え、写真・彫刻分野の作品について授業案を増やし、遠隔地や離島部を含む長崎県内の学校で実践後、ブラッシュアップした。



「PEACE」製作

長崎大学情報データ科学部の金谷一朗教授ご協力のもと開発。ピックアップ作品の高精細画像の撮影や、より学びを多方面に深められる関連資料の作成も行い、すべて「PEACE」に格納した。



研修・視察・普及活動

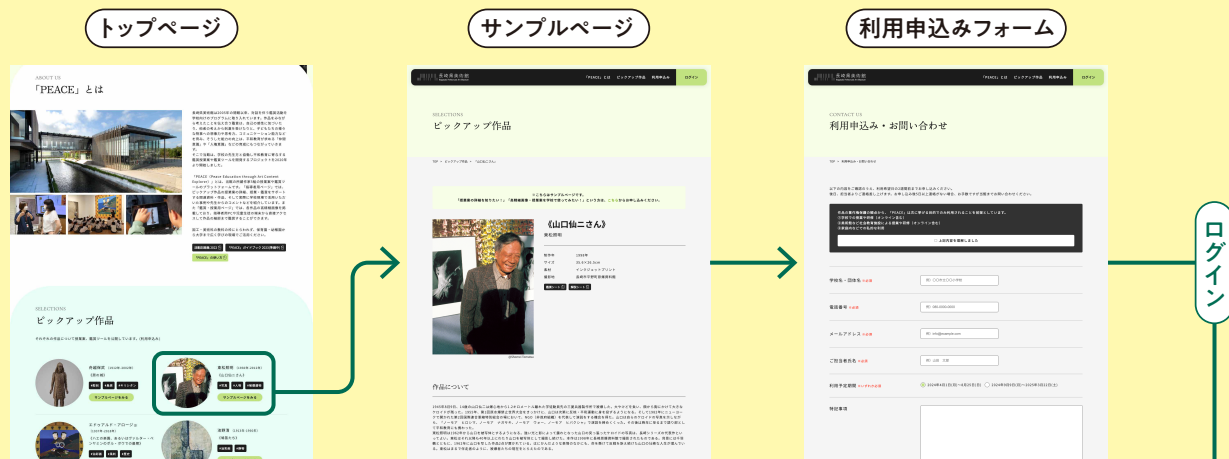
- ・ティーチャーズデイ(長崎市、五島市)
- ・視察(岩手県立美術館・原爆の図 丸木美術館ほか)
- ・2022年度授業案・鑑賞ツールの活用(保育園・中学校・高等学校・大学 各1件)

先生のための鑑賞教育×平和教育プラットフォーム「PEACE」できました!

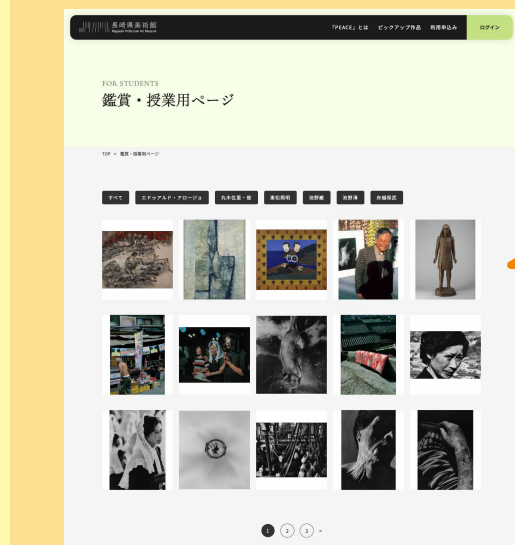
「PEACE」は、長崎県美術館所蔵作家5組の作品を対象とした多様な授業案や関連資料、作品の高精細画像にインターネット上でアクセスできるプラットフォームです。授業案や高精細画像は、保育園から大学まで様々な教育現場の先生主導で実践・活用でき、学習者は地理的、時間的な障壁を越えていつでもどこからでも作品と出会うことができます。

作品や自己、他者との対話を伴う鑑賞によって、学習者が作品の背景にある歴史的な出来事だけでなく、現在を生きる自身の身近な世界との関連にまで思いを馳せる、未来志向の学びにつながることを期待し、「Peace Education through Art Content Explorer」の頭文字をとって「PEACE」と名付けました。

作家・作品、授業案について、サンプルページで大まかな内容をご覧いただけます。「授業案の詳細を知りたい」「鑑賞プログラムを実践したい」という方は、利用希望日の2週間前までにフォームよりお申し込みください。後日、当館よりログインに必要なパスワードをご連絡します。



鑑賞・授業用ページ



各作品の高精細画像を見ることができます。学習者が各自の端末から直接アクセスすることも可能。作品そのものと同じ向きのため、作品名はあえて併記せず、作品情報をどこまで学習者に提示するかは指導者がコントロールできるようにしています(上図:使用イメージ)。

指導者用ページ



授業案・資料

各作家の作品について、バリエーションに富んだ鑑賞授業案(p.8)を作成し、授業で使えるワークシート等の資料と併せて公開しています。対象や目的に合わせて、授業時間の長さや内容をカスタマイズして使用できます。



関連作品・資料(動画・外部リンク)

作家や作品、歴史的背景などをより深く知るための手立てとして、関連作品や動画、外部サイトへのリンクを添えています。

活用事例

実際に学校現場で実施した、作品画像や事業案を使ったプログラムのレポートを公開しています。授業の流れや子どもたちの反応、先生方からのコメントなどを掲載しています。



「PEACE」コンテンツ紹介

作家・授業案

絵画・彫刻・写真と、ジャンルの異なる所蔵作家5組の作品について、様々な角度から鑑賞を深める授業案をつくりました。

1 丸木位里 (1901-1995) ・俊 (1912-2000)



《母子像 長崎の図》
1985年、墨・岩絵具・紙、201.0×248.5cm

1945年に原爆投下後の広島をのぞいた経験から『原爆の図』シリーズを制作した丸木夫妻は、同シリーズ最後の第15部「長崎」(長崎原爆資料館蔵)完成後、本作を手掛けた。**#原爆 #日本画**

授業案「五感をひらく作品鑑賞」

対象:小学生~中学生

ポイント:描かれた人物の様子や表情などをじっくり観察しながら、作品のなかの世界のにおいや音など見えないものへの想像を膨らませていく。

2 池野清 (1913-1960)



《鳩笛たち》
1959年、油彩・カンヴァス、116.9×91.0cm

長崎出身の洋画家、池野清は1945年に原爆投下直後の長崎の爆心地に救護活動のために入り被爆する。1960年に47歳で亡くなるまで、静かで穏やかな色調で静物や樹木、風景などを描き続けた。

#静物画 #油彩画 #原爆

授業案「作品から想像を広げよう」

対象:小学生

ポイント:1点ずつ池野の作品を鑑賞するグループワーク。よく観察して気づいたこと・受けた印象について、グループ内で意見交換しながら、作者の思いや作品のなかの世界へ想像を広げていく。

3 エドゥアルド・アロージョ (1937-2018)



《ハエの楽園、あるいは
ヴァルター・ベンヤミンのボル・ボウでの最期》
1999年、油彩・布、木、鉄、352×412cm
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023 G3415

スペイン出身の画家、アロージョはしばしば政治状況や権威を批判・風刺する作品を制作した。本作はドイツ系ユダヤ人の思想家、ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)がナチスの迫害から逃れるべく亡命を図るも叶わず、自死した出来事を題材としている。**#風刺 #歴史 #油彩画**

授業案①「モチーフから想像する作品の世界と作者の思い」

対象:小学校高学年向け

ポイント:「ハエ」「人物」「ペーパー」など、各モチーフに込められた意味をグループごとに考え、作品世界と作者の思いを想像していく。

授業案②「鑑賞で広がる世界とわたし〜今をつなげる美術のいとなみ〜」

対象:中学生向け

ポイント:作品に対する意見や気づきを、論理的に分類・整理してから他者と共有し、作品がもつ歴史的背景を踏まえて作品が伝えるメッセージを考える。

4 舟越保武 (1912-2002)



《原の城》
1971年、ブロンズ、197×64×56cm

カトリック信者の彫刻家、舟越保武は長崎市西坂に建つ《長崎26殉教者記念像》など、キリスト教に関連する作品を多数制作した。本作は、島原・天草の乱の舞台となった原城址を訪れた際に得たヴィジョンをもとに構想が練られた。**#彫刻 #島原 #キリシタン**

授業案「彫刻作品にみるキリシタンの歴史」

対象:小学校高学年~中学生向け

ポイント:島原・天草の乱について事前に学習してから、じっくり作品を鑑賞する。人物像を様々な角度から観察したり、ポーズや表情を真似たりと、作品の人物がどんな人間なのかを考える。

5 東松照明 (1930-2012)



《「山口仙二さん」長崎市平野町 長崎原爆資料館》1998年、
インクジェットプリント、35.6×26.5cm ©Shomei Tomatsu

戦後日本を代表する写真家の東松照明は、1961年に初めて長崎取材してから約50年間にわたって、長崎の日常風景や被爆者たちの人生に寄り添いながら写真を撮り続けた。**#写真 #被爆 #人物**

授業案「写真からうまれるストーリー〜戦後の長崎をつむぐ〜」

対象:中学生以上向け

ポイント:東松照明の作品15点について、作品同士の関係性や作品から伝わるものを感じ取り、「自分ならどの東松作品を、どのように展示するか」という観点で発表しよう。

鑑賞ツール

鑑賞活動や授業で使える・役立つツールも多数用意しました。



1

高精細画像 (2D・3D)

作品を細部まで鑑賞できるよう、高精細な画像を公開しています。また、アロージョの作品に取りつけられた立体的なハエのモチーフの一部は、長崎大学情報データ科学部の金谷一郎教授と研究室の学生にご協力いただき高精細3D画像化(上図)しました。



2

指導者用資料 「解説シート」「鑑賞シート」

作品の作者や主題等に関する情報と、各作品の鑑賞のポイントをまとめた資料を現場の先生方のご意見を伺いながら作成しました。



3

解説動画、参考文献、 外部リンク

池野清の画業や作品について学芸員が解説する動画を製作しました。その他、作品に関する文献や外部サイトなどの情報をまとめて公開しています。

授業案と鑑賞ツール、使ってみました！

「PEACE」に掲載している授業案や鑑賞ツールは、実践を踏まえて学校現場の先生方と協働してつくり上げました。当館エドゥケーターによる出張授業だけでなく、授業案を参考とした独自の鑑賞授業を現場の先生が実施されたケースもあり、保育園から大学まで幅広く活用していただきました。鑑賞ツールを使った鑑賞活動はもちろん、図画工作・美術科に限らず総合的な学習の時間や国語科など様々な教科の授業で授業案が取り入れられました。

池野清作品

池野清 作品から考える平和①



実施校:長崎市立大浦小学校 / 実施日:2021年7月1日(木)
対象:6年生66名 / 教科:図画工作科
授業案「作品から想像を広げよう」のモデル授業として、当館エドゥケーターが出張授業を行った。油彩画のサンプルを触ったりにおいを嗅いでみたりしたことで、児童が質感や物質感を体感しながら作品のイメージを広げることができた。

池野清作品

池野清 作品から考える平和②



実施校:長崎市立勝本中学校 / 実施日:2021年10月11日(月)
対象:1,2年生98名 / 教科:美術科
離島に位置する同校と当館とをオンラインで結び、展示室のエドゥケーターとコミュニケーションを取りながら作品画像を鑑賞した。見えない「音」をテーマに、作品のなかの世界の音を想像することで、グループごとに鑑賞を深めた。

エドゥアルド・アロージョ作品

アロージョさんの作品をみてみよう！



実施校:たちばなこども園/有家たちばなこども園
実施日:2022年12月13日(火)、14日(水)
対象:年長児18名 / 教科:なし
アロージョ作品の2D・3D高精細画像の試験運用を兼ねたオンライン鑑賞会。当館エドゥケーターと同園の先生が進行役を務め、園児の気づきや発言を共有しながら鑑賞した。

エドゥアルド・アロージョ作品

モチーフから想像する作品の世界と作者の思い



実施校:長崎市立大浦小学校
実施日:2022年11月10日(木)・14日(月)
対象:5年生73名 / 教科:総合的な学習の時間
本授業案の作成者、松浦恵子氏(同校教諭)によるモデル授業実践。色遣い・配置などに注目しつつ、この作品における各モチーフの意味合いについてグループごとに考え、全体で共有した。

このほかにも、幅広い年代の子どもたちを対象に鑑賞プログラム・授業を多数実践しました。
各プログラムの詳細や、先生の感想等は「PEACE」をご覧ください。

エドゥアルド・アロージョ作品

鑑賞で広がる世界とわたし ～「今」をつなげる美術のいとなみ



実施校:長崎市立淵中学校
実施日:2022年11月22日(火)・29日(火)・30日(水)・12月1日(木)
対象:1年生132名 / 教科:美術科
本授業案の作成者、森法子氏(同校教諭当時)によるモデル授業実践。生徒は作品に対する自分の気づきや疑問を、「造形」「比較」「発想」「その他」に分類整理しながらデジタルホワイトボード「Google Jamboard」で共有した。

エドゥアルド・アロージョ作品

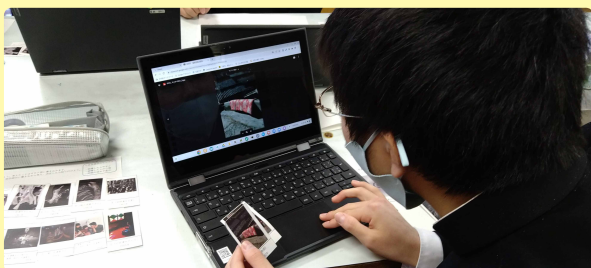
美術でつなげる平和の願い



実施校:長崎市立山里中学校
実施日:2023年7月3日(月)、4日(火)、6日(木)、7日(金)、11日(火)
対象:1年生161名 / 教科:美術科・総合的な学習
パブロ・ピカソ、エドゥアルド・アロージョ、丸木位里・俊の作品4点について、作品画像を用いて鑑賞を深め、後日来館し実作品を前に感想や気づきを共有した。

東松照明作品

写真から生まれるストーリー ～戦後の長崎をつむぐ～



実施校:五島市立久賀中学校 / 実施日:2023年12月13日(水)
対象:1～3年生7名 / 教科:美術科
本授業案のモデル授業として実施。離島部にある同校と当館をオンラインで結び、東松作品が展示される様子を見てから、生徒は手元の端末で高精細画像の鑑賞に取り組んだ。

エドゥアルド・アロージョ作品

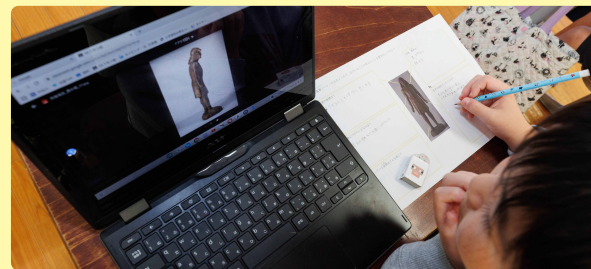
考えを共有していくために



実施校:長崎県立島原工業高等学校
実施期間:2023年12月8日(金)～20日(水)
対象:2年生79名 / 教科:国語科
作品画像の観察や作品にまつわる文献資料の読解を通して作品や社会に対する意見をまとめ、アロージョの作品をテーマとするパネルディスカッションに臨んだ。

舟越保武作品

彫刻作品にみるキリシタンの歴史



実施校:波佐見町立中央小学校、波佐見町立東小学校
実施日:2023年11月29日(水)
対象:中央小学校5年生65名、東小学校5年生26名 / 教科:図画工作科
本授業案のモデル授業として実施。作品のポーズを真似したり、地域の歴史と結び付けたりしながら、作品の人物がどのような存在・心情であるかを想像した。

東松照明作品

写真から生まれるストーリー ～戦後の長崎をつむぐ～



実施校:長崎外国語大学 / 実施日:2024年1月9日(火)
対象:1～4年生20名 / 教科:教養教育(芸術論)
音や音楽を中心に芸術と社会の関係を考察する講義のなかで、当館エドゥケーターが出張授業を行った。自分の考えを作品の組み合わせ方で表現するプロセスは学生にとって新鮮な取り組みになった。

「PEACE」のあれこれ

—「PEACE」開発者と鑑賞ツール利用者による座談会

実施日:2024年1月7日(日)13:00~15:00

開発者:金谷一朗(長崎大学情報データ科学部 教授)、山口百合子(長崎県美術館 事業企画グループサブリーダー)

利用者:中島素子(長崎県立島原工業高等学校 教務主任 国語科)、宮崎友理子(たちばなこども園/有家たちばなこども園 保育教諭)

コメンテーター:山岸利次(長崎大学人文社会科学域教育学系 准教授)

記録・編集:堀越蒔季子(長崎県美術館 エducator)

南島原市⇄長崎市 作品画像を使った鑑賞の手応え

山口: 本日は、本プロジェクトへ継続的にご協力いただいているの方々にお集まりいただきました。まずは宮崎さんに、たちばなこども園と当館とのオンライン鑑賞会(p.10)について、園児の皆さんの様子や作品画像を使った鑑賞の感想などを伺いたいです。

宮崎: 私たちのこども園は南島原市にあって、長崎市の美術館へ行くには2時間くらいかかるので、ほとんどの子どもたちが美術館に行ったことがないという状況です。でも、園の子どもたちは普段から絵を見るのが大好きで、どんな絵を見せても話が膨らむような感じの子たちです。そんななか、昨年度、堀越さんとオンライン鑑賞会をさせていただきました。

アロージョの作品は、絵の力があるというか魅力がある作品なので、子どもたちはすぐに惹きつけられて見ていました。細かくは覚えていないんですけど、「これは山じゃないかな」とか作品の一部分に対する意見も、「この顔の人は死んでる/死んでしまったんじゃないか」とか作品の本質に迫るような意見もたくさん出ていたと思います。発達段階的に、まだそこまで言葉での表現が得意じゃない子もいたけれど、うなずいたり、指をさしたりとか、その子たちなりに何かを感じ取って体や態度で表現しているんだなど、見ていて感じました。



宮崎友理子

堀越: 初めに作品全体を見て「森みたい」「なんか人がいる」って言っていたところから、モチーフごとに観察したり、「自分だったらこうつくる!」って素材が気になってきたりと、見る視点や話が発展していききましたね。そして最後にまた作品全体を見せて、「この世界ではどんなことが起きているのかな?」って問いかけたら、それまでの発言を結びつけながら皆さんすごく発想を膨らませていました。

山口: 見せたい部分を拡大して見せられるっていうのは、やっぱりデジタルの特性ですね。

宮崎: はい、本当にそうですね。絵具と絵具の境界が白っぽくなっていて、園児から「切り絵に見える」みたいな意見が出た時も、堀越さんが画像をビューって拡大してくださって「このことね、たしかに!」みたいな確認がとてもしやすかったです。

あと、額縁のハエを3D画像で立体的に見られたのもすごく良かったです。展示室では絵の横や下に潜り込んで見たり、作品に近づきすぎたりできないじゃないですか。でも3D画像で、作品の立体部分をちゃんと立体的に見ること、

いろんな角度から回しながらハエを見ることができて、そこがとても良かったです。

家に帰ってから、保護者の方に「今日美術館の人と話したんだよ」と話してくれたみたいです。その次の週末、美術館へ足を運んで「ハエの作品を見てきたよ!大きかったよ!」って報告してくれた子もいました。こうやってオンラインで作品を鑑賞して、1年後とか、5年後10年後に美術館へ行って、実物を見るかもしれないっていう、「その後」につながるのがとてもいいなと感じました。

山口: そんなふうに印象に残って美術館に来てくれるって嬉しいですよね。作品画像で鑑賞して、色々想像が膨らんだ状態で実物作品を見た時って、絶対また違う感動とかリアクションが起きると思うんですよね。

宮崎: 絶対そうだと思います。うちのこども園はものすごく田舎にあるので、文化・芸術面での刺激が極めて少ないですよ。オンラインで美術館の人とつながれたこと自体が、もう絵を見る以前に嬉しいっていう感動があったんだと思います。

美術作品のデジタル化 課題と成果

山口: こうした実践も踏まえつつ、デジタル鑑賞ツールから「PEACE」の開発までご協力いただいた金谷先生にもお話を伺いたいです。

金谷: いろんな切り口でお話をさせていただきたいんですが、元々僕は文化遺産のデジタル化を行っていて、一番専門にしているのが世界遺産のエジプトのピラミッドです。造られてから4000年以上経っていて壊れ始めているので、デジタル化して今の状態を残す、ということをしているんですね。ピラミッドは当初、お墓として、祈りの場として、再生の場として造られたのですが、その後エジプト王朝は滅んでしまって紀元前には既に観光地になっていました。つまりモノなんですよ。だからその形だけデジタル化すればもう「できた」って言えるんです。



金谷一朗

僕が長崎に引っ越してきたのが5年前で、ちょうど「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産になるところだったんです。久賀島の集落とか、大浦天主堂であるとか、そこはピラミッドと違って今でも祈りの場なんですよ。それを「デジタル化しましょう」って言っても、形はデジタル化できたとしても、そこに通う信者の方の祈りまでデジタル化できているのかっていうと、それは形ではなくて。

そして、それはこのプロジェクトの美術作品のデジタル化(3D画像製作)でも同じことで、オリジナルがもっている熱量までデジタル化できているかという点と全然できていない。これは我々の課題として、ずいぶん突き付けられたことです。アロージョのこの作品が大きいのは一つの特徴じゃないですか。「アロージョは何を考えてこんな大きさにしたんだろう」とか、「そこまで大きくしなくても」とかいろんなことを考えさせられますよね。そういう特徴はデジタル鑑賞ツールでも確かに伝えるべきことだと思います。

作品の大きさについては、実物をみたとときの衝撃を超えるものはないかなと思うんですけど、逆に、今の子どもたちって画面上のコンテンツを手でピーって拡大するのは慣れてますよね。実世界ではできないけど、デジタルの上では可能で、制作中のアロージョとたぶん同じ目線と距離で作品を見ることができる。作品の上の方のハエとかは、展示室で見上げても遠くてよく見えませんから、画面上で作品に近づいて見て、3D画像を様々な角度から見ると、ということを繰り返しながら鑑賞できたのは、デジタルだから実現したことだと感じました。

もちろん、デジタル化したものがオリジナルの完全な置き換えにはならないんだけど、その作家が本来伝えたいものっていうのを、実物とは別に伝える手段にもなっているな、ということを勉強させてもらいました。オンライン鑑賞会をやっていただけなのはありがたかったです。

山口: 使ってみてわかることって本当に多いですからね。3D画像をつくる時、研究室の学生さん方に細かく角度を変えなが

ら何枚も作品の写真を撮ってもらいましたよね。

金谷: そうですね。情報データ科学部でこういうことを言うとオカルトっぽくなっちゃいますけど、本物だけが持っている熱っであるじゃないですか。それを、ちゃんと伝える。鑑賞っていうのは、見る人と作品との対話でもあるので、対話できるだけのクオリティをちゃんと伝えてあげるといのが、我々エンジニアとしては一番外しちゃいけないところだと思っています。

エンジニアリングってモノをつくるための学問で、アートとテクノロジーって「美術」か「技術」かっていう違いはあれど、人がつくるという点で結局同じものなんです。モノをつくる学問は、造られたものから読み取る学問でもあるんですよ。工業製品から設計者の意図を読み取りなさいっていうことを常にやらないといけない。そう考えると、学生は美術館でこの作品を見て、描いた画家のメッセージを読み取らなきゃいけないので、1,000枚くらい作品の写真を撮ったのはその訓練にもなったなと思いました。模写と同じで、自分のなかで解釈しながら再構成していけるように、考えながら写真を撮るってことです。

山岸: 見えているものを受け取るだけでなく、自ら作品に働きかけて、実際に頭と体を使って、対話して意味を引き出すって、美術の専門家の方がやっているようなことを、オンラインとかデジタルでできるようになったっていうのかな。そして、宮崎さんのことも園では子どものうちからそういう経験がやれているって、すごくうらやましい。熱量をいかに伝えるのかっていう課題があるのと同時に、デジタル化したことで無限の可能性が広がって、新たな作品との関わり方を模索できるんだなと思って、なんだか感動しました。



山岸利次

国語科×美術鑑賞×工業高校

山口: アロージョの作品について、昨年度、小学校・中学校向けの授業案を先生と協働して作りましたが、今年度は本プロジェクトで初めて高校で鑑賞授業を実践していただきました。しかも国語科での授業というのも初めてでした。取り組みきっかけは何でしたか？

中島: 私は教員の研修を受け持つことが多くて、たまたま見た国語科の初任の先生の授業で、プロレタリア文学の『セメント樽の中の手紙』(*1)が取り上げられていて。妊娠は女性のもの、みたいな時代の考え方が表れている文学作品ですね。そして同時期に、保健体育の授業ではパートナーシップについて、妊娠は男女ともに関わることで、支え合っていかなければならないっていうような現代的な考え方を生徒は学習していました。でもその時、これらの学習が繋がってないなって思ったんです。

広く社会の変化や流れを生徒が理解できるように、いろんな教科の学習をつなぐような授業があったらいいなってずっと考えていたところで、ちょうど美術館の取り組みを知りました。昨年、一昨年の講演会やシンポジウムに参加させていただいて、あらかじめパッケージ化された授業案があれば、もしかしたら他の先生たちも、この教科・単元で実践できるって思ってもらえるんじゃないかと考えました。

あと、金谷先生がおっしゃったように、うちは工業高校だから私はもっとアートのことを学んで良いと思っていたんですけど、意外と現場の先生たちは芸術よりも「より便利に」「より使う人のことを考えて」ということを重視されていて。そこにデザインとかアートとかは全然繋がってなくて、もっとできることないかなってずっと思っていたんです。

じゃあ国語科で何をしようかと思ったときに、鑑賞教育は言語化をするので、パネルディスカッションを軸に据えることにしました。他者と意見を交わす、オープンエンドで決して一つの結論を求めない授業にしたい。

山岸: 文学作品の鑑賞と、美術作品の鑑賞の違いって何かありましたか？

中島: そうですね…。そもそも国語科で文学作品の鑑賞はあまりしないです。「これはどんな意味ですか?」って論理的に読むことを学習するので、情緒的な部分はあえて切り捨てて日頃生徒に読ませている気がします。だからこの授業ではもっと自由に見ていいんだよっていうのを繰り返しながら見せていきました。国語科の授業としては、『ベンヤミンの黒い鞆—亡命の記録』(*2)を読解して作品画像と比較させながら、「じゃあこの絵はどういった背景をもった絵なんだろう?」っていうことを生徒に考えさせてみました。



中島素子

山口: アロージョの作品はモチーフが少し抽象化されていて、読み取りづらい部分があったと思うんですが、生徒の反応はいかがでしたか？

中島: うーん、工業高校の生徒は、絵を見て思ったことを話すっていうことに慣れていないので、自由にみる鑑賞を難しく感じているようでした。見て考えて話す力って、やっぱり日頃から経験してって培われるものなんだなと感じました。でも、ベンヤミンやナチスについて情報を得た後だと、そこからアロージョの作品と向き合って自分の意見をどんどん書いていました。その意見をもとにパネルディスカッションをしたって感じですね。鑑賞は難しかったけど、考えを整理して言語化して話し合うっていう点ではうまくできたという手応えがありました。

山口: こうした観察力や思考力って経験でしか培われないものなので、短時間の単教科の授業で向上させることはたぶん不可能だと思います。だからこそ、今回「パネルディスカッションをする」という国語科の単元のなかで美術作品の鑑賞が盛り込まれたことはとても意義深く思います。この授業で作品の歴史的背景に少し触れて、今度は美術科の授業で作品の質感やタッチなど造形的な要素に目を向ける鑑賞をしたり、そこから生徒の造形表現につなげてみたりできると、見る・考える力が少しずつ身に付くし、教科がより「つながる」んだろうなって、可能性を感じました。

中島: あとは、生徒のレディネスという力に合わせて、どこまで作品の情報を与えるかとか、現場の先生方がこの授業案を調整できるかなと思います。いろんな切り口を持っている作品ですからね。

「PEACE」運用開始に向けて

山口: 「PEACE」は2024年の4月頃の運用開始を予定しておりまして、様々な教育現場で使っていただけるよう、ティーチャーズデイや研修会などを開催して周知・普及していこうと思います。

宮崎: 「PEACE」の運用が始まったら、幼児教育の現場でも取り入れたいと思っています。幼児教育のカリキュラムは、小中高ほど厳密ではないのでゆるやかに使えたらと。日頃は「色々な作品に触れて感性を豊かにする」、「自分の意見を他者の前で言う」、「いろいろな人の考えを聞いてみる」というくらいのゆるやかなねらいで鑑賞をやっているので、もし「PEACE」がオープンしたらぜひ夏(8月9日)に向けて活用していけたら面白いんじゃないかと思いました。

山口: ありがとうございます。各コンテンツや「PEACE」自体について、現場の先生方から内容や使用感についてご意見をいただきながらブラッシュアップしていきたいと考えております。本日は皆さまありがとうございました。

*1: 葉山嘉樹著「セメント樽の中の手紙」『文芸戦線』3巻1号、文芸戦線社、1926年、pp.11-13。

*2: リーザ・フィットコ著、野村美紀子翻訳「ベンヤミンの黒い鞆—亡命の記録」晶文社、1993年。

座談会を終えて

山岸利次(長崎大学人文社会科学域教育学系 准教授)

長崎県美術館が平和教育としての鑑賞教育のプログラムの開発事業に着手して3年目を迎えたが、本年はプログラムの拡大と内容の深化という2つの点において大きな成果が上げられた。

拡大とは本プログラムが対象とする学校の拡がりである。昨年度は小・中学校における教育プログラムの開発に重点が置かれたが、今年度はその成果をもとに、新たに保育園という幼児教育、そして、高等学校における教育プログラムの実践がなされ、さらには、大学でも本プログラムに基づく講義も行われた。このことをもって幼児教育から高等教育まで本プログラムはすべての学校段階をカバーしたわけだが、社会教育施設である美術館が1つの目的のもとに学校段階を越えた教育プログラムを構築したことの意義は極めて大きい。社会教育と学校教育との連携は近年改めて強調されることであるが、それぞれの学校段階を越えて統一した目的のもとに教育プログラムを構築するという試みは、社会教育施設だからこそできたことであるだろう。

内容の深化については「教科を横断したプログラムの実践」と「プログラムにおける時間の位置づけ」ということが際立っている。前者は、座談会にも参加した中島先生の試みである。中島先生は、高等学校国語科の授業において本館の美術作品の鑑賞教育を取り入れた。絵画と文学作品という媒体を越え、教科を横断し、平和についての生徒の主体的な学習を促すという実践は、本プログラムの可能性を大きく拓くものであった。一方、後者は今年度新たにつくられた東松照明の作品の教材である。これまで本プログラムにおいて作成された教材は、主に1つの作品を鑑賞するものであった。しかし、東松の写真作品を用いたプログラムは、異なる時期の複数の写真を用いて時間の流れのなかで個人の生について考えることを子どもたちに求めるものであった。写真を選び出し、それを時系列に沿って並べ、ストーリーを紡ぎ出す。こうした行為を通して、子どもたちは被写体の人物や出来事について考え、1945年8月9日という過去の一時点ではなく、そこからはじまる現在、そして未来へとつながる時間の流れについて捉えることができたであろう。被爆を経験した方がその後どのような人生を送ったのか。生きることで平和についていかなる思いをもち、そして、行動したのか。生きることの支えは何だったのか。こうしたことを想像・思考することは、先達の平和への思いを継承し、そして、現在・未来の平和を構築するうえで必須のことであろう。この点、教材で取り上げた東松の作品が個人を主題としているということは確認されてよい。というのも、平和を国と国との問題、あるいは社会における問題としてのみ捉えてしまうと、そのことが平和を自分事として捉える契機を損うことにつながるからである。平和という、とすると国家や社会における出来事において(こそ)、その下に1人1人の個別具体的な生があるということ、そして、そうした1人1人の生の現実に基づく平和への思いこそが平和を構築する上で大事なことであるということ。東松の作品は、こうしたことを私たちに教えてくれるのである。

こうしたことは別に、改めて「平和教育としての鑑賞教育」の可能性が確認されたということも強調されるべきである。今年度新たに舟越保武の《原の城》を教材としたが、授業では子どもたちは彫刻の姿をまねながら、自らの体と心を通じて、他者の痛みや苦しみといったことを想像し、そこから平和について考え始めた。他者の経験を自分の心と体を駆使して想像・経験し、そこで生まれた思いや考えを対話によって他者と共有する。本プログラムがこれまで一貫して大切にしてきたのは、例えばこういうことであり、そして、それこそが包括的平和教育の目指すところでもある。自分の頭や体で他者のこうした思いに気付くこと。このような他者への想像性、そして、お互いの違いを尊重して他者と交流することこそが平和を考える基礎となるのであり、未来志向の平和教育につながっていく。

平和学習という言葉を字義通りに「平和を構築するための学習」と解すれば、それは学校を卒業した時点で終わるものではない。そうではなく、むしろ、個人が主権者になるときに、学習は新たなステージに移行すると言うべきであろう。その意味では、個人の平和学習に終わりはない。そして、学校における平和教育は、こうした平和について学習し、平和を構築する主体を形成する基盤となるものである。社会教育施設である美術館が平和教育のプログラムを構築することには、こうした点からも意義がある。そして、「PEACE」はこうした平和教育の実践をそれぞれの学校で実現にすることにつながるものである。「PEACE」により新たな平和教育・学習の形が生まれることを願ってやまない。

編集後記

丸木作品を用いた「平和教育×鑑賞教育」のプログラム実施に端を発し、3年かけてじわじわと拡がりをみせながら、鑑賞プログラムをひとつのかたちを集約させたのが「PEACE」です。じわじわと拡がりをみせるというのは、ひとつの点から横にも斜めにも墨や絵の具が広がっていくようなイメージです。単に年を経るごとに鑑賞プログラムをアップグレードさせたということではなく、根幹にある「対話」を伴う鑑賞スタイルが前提にあり、それを基点に関わってくださったさまざまなフィールドの人たちの協力によって少しずつ肉づけされてきました。また取り上げる作家や作品を増やししながら、利用者(ここでは学校の先生や子どもたち)にとってより有用性を高めることを念頭に置き、現場の先生方と共に授業案づくりに動んできた成果でもあります。

この活用のありかたは、授業者のアイデアによってそのバリエーションはいかようにも膨らみます。図工・美術における教科学習だけでなく、対話活動を軸にした作品鑑賞を平和学習の側面からアプローチしたり、作品が生まれた背景にある史実を知ることから読みとく鑑賞として社会科の学習と結び付けたり、自分の思いを言語化して伝える国語科で学習したりと教科横断的な学びを可能にします。作家間のつながりから比較鑑賞を試みるのもおもしろいかもしれません。同時に「PEACE」は完成形なのではなく、ここからさらにブラッシュアップしながら厚みを増していくこととなります。制作工程や思考のプロセス、そこで使われる道具や素材にフォーカスすることで作家の意図や作品理解がより深まるでしょうし、ジャンルで分類するならば版画作品が加わることで幅広い表現技法に触れる機会にもつながります。現段階では、まだまだ開発途上にあり新たな可能性を含んでいることをご承知おきください。

また平和教育で学び得る資質においても、人が成長する過程のなかでじわじわと個々の内面に拡がっていくものではないかと思っています。このプロジェクトを進めるにあたり、さまざまな年代の子どもたちと出会い、授業案の実施に携わってきました。実施する側にある自分自身が子どもたちの考えを聞くたびに琴線に触れる体験をし、心に何か染みわたってくる感覚を味わいます。過去に起きた出来事や生まれた作品と時代を超えてめぐり逢い、現代を生きる私たちがともに語り合っている時間こそがとても尊いものだと思えます。まずは、「PEACE」をのぞいてみてください。そこから何かが生まれるかもしれない、そんな期待を込めて皆様に活用されることを心より願っています。

山口百合子(長崎県美術館事業企画グループサブリーダー)

令和5年度 文化庁Innovate MUSEUM事業

学校とミュージアムの共創—平和教育と鑑賞教育プログラムの開発・活用

長崎県美術館2023

先生のための鑑賞教育×平和教育プラットフォーム「PEACE」ガイドブック

企画・編集 | 長崎県美術館 教育普及・生涯学習(山口百合子、堀越蒔李子)

デザイン | 古庄悠泰、古庄結(景色デザイン室)

印刷 | 株式会社インテックス

発行 | 学校と共創する美術で学ぶ平和教育実行委員会

〒850-0862 長崎市出島町2-1(長崎県美術館内)

発行日 | 2024年2月25日

